



△ 附属図書館本館



△ 附属図書館医学部分館

新入生の皆さんへ あなたの図書館活用法を築こう

附属図書館医学部分館長 栗山 一孝

ご入学おめでとうございます。多くの新入生の皆さんは、これから始まる大学生活を思い描いて希望に胸を膨らませておられることでしょう。しかし、皆さんの中には大学という新しい環境に対して一抹の不安を感じている人がいるかも知れません。琉球大学は、国立大学の中でも有数の広大なキャンパスを擁しており、キャンパスには講義棟や研究棟に加え様々な施設の建物が配置されています。また皆さんの周囲には顔馴染みよりも県内や全国から集まってきた新入生が多数を占めています。さらに皆さんは、大学が提供している多くの講義科目の中から自分自身で受講すべき科目を選択しなければなりません。講義も各学部の多くの先生達が担当します。このように大学の環境は、高等学校とは随分違っていると実感されるでしょうが、大学のオリエンテーションや各種ガイダンスも開催されますので是非参加して、大学という環境をまずは知るように努めて下さい。しかし、大学に慣れるまでにはだれでも多少の時間を要します。焦らずじっくり、少しずつ馴染めるよう努力して下さい。

講義がスタートし、いよいよ大学での勉強が始まります。大学での勉強は、自由度が大きく皆さん次第で適当に消化することもできますし、やろうと思えば大学の様々な施設や先生達を訪ねて研究の現場を見ることもできます。さらに、受講科目によっては課題を与えられレポート提出を求められることも少なくありません。このような場合には、講義内

容だけではなく自分で情報を収集し、その情報を取捨選択して自分の発想やアイディアに活かしてレポート作成する必要があります。情報源となるのは書籍や最新ジャーナルなどの紙媒体による情報と電子ジャーナルやインターネット、さらにDVD映像などによる電子媒体の情報でしょう。ここで登場するのが、附属図書館です。図書館は紙媒体や電子媒体情報を検索する空間を提供しています。

附属図書館でも新入生の皆さんに向けてオリエンテーションや図書館活用のためのガイダンスを設けています。ぜひ参加して、図書館活用法を学ぶ中から、あなた自身にフィットした活用法を見出し、これからの大学での勉学をより充実させて欲しいと願っています。附属図書館はキャンパスのほぼ中央の便利な所にありますので、新入生の皆さんにも分かりやすいと思います。気楽に玄関に入って、まずは図書館を探して下さい。高等学校や市中の図書館とはまた違ったタイプの図書館であると実感することができます。分からないことがあったら近くの図書館職員に何なりとお尋ね下さい(「レファレンスサービス」という窓口もあります)。図書館のスタッフ一同皆さんが訪ねて下さることを心待ちにしております。

あなたのキャンパスライフに、

Buon Viaggio!

(くりやま かずたか：医学部病態検査学教授・血液学)

目次

- | | | | |
|----|------------------------|----|-----------------|
| 1 | あなたの図書館活用法を築こう(巻頭言) | 11 | 図書館トピックス |
| 2 | 読書論文コンクール受賞作発表について | 11 | 図書館見学者 |
| 3 | 読書論文コンクール最優秀賞(学長賞)受賞作 | 11 | 当館資料の放送取材・刊行物掲載 |
| 6 | 読書論文コンクール優秀賞(図書館長賞)受賞作 | 12 | お知らせ |
| 10 | 琉球大学附属図書館貴重書展 | | |



読書論文コンクール受賞作発表



最優秀賞(学長賞) 1編 賞状と副賞 (欧米往復航空券と滞在費5万円)
 壮大な音楽のなかで (小橋川大地・工学部4年次)

優秀賞(図書館長賞) 1編 賞状と副賞 (ノートパソコン)
 社会を生きる「人」としての医療者を目指して
 (石原宗典・医学部2年次)

優良賞 4編 賞状と副賞 (図書カード2万円分)
 全身で感じる読書—町田康『きれぎれ』を読んで—
 (船道晋作・法文学部3年次)

影絵の住人 (中根志保・教育学部4年次)

森林の思考・砂漠の思考を読んで (神沼守芸・医学部1年次)

「センス・オブ・ワンダー」を読んで (山腰晃治・医学部2年次)

※ 年次は受賞式平成19年2月7日現在



△ 受賞者の皆さん

左から小橋川大地, 神沼守芸, 中根志保,
 船道晋作, 山腰晃治, 石原宗典

(敬称略)

教養図書コーナー開設5周年記念「読書論文コンクール」講評 読書論文コンクール選考委員長 山里 勝己

昨年7月から12月15日まで募集した、教養図書コーナー開設5周年記念「読書論文コンクール」の応募数は、予想を超える36編の応募があった。応募した36編について選考委員会で選考を行った結果は上記の通りである。

ここで、選考の講評を記しておきたい。

コンクールの募集テーマであるが、応募要領にも書いてあるとおり、「私が影響を受けた本」であり、大学入学後、知的刺激を受けた本、ものの考え方や人生観に影響を受けた本などの読書体験を中心に書くこと、ということであった。つまり、論を展開する場合には、読んだ本が、自分にとってどのような意味を持つ本になったか、事象の見方・考え方等にどのように影響を与えてくれたか、それを具体的に、本の内容と自分を関わらせて、自らの言葉で展開する工夫が求められる。またコンクールの名称を「読書論文」としたせいか、応募者にとって戸惑った側面があったかも知れないが、単なる読書感想文ではない、かといって学術論文でもない、両方併せ持った総合的な構成が求められる。

そういう観点から、最優秀賞(学長賞)に選ばれた小橋川大地君の「壮大な音楽の中で」と優秀賞(館長賞)に選ばれた石原宗典君の「社会を生きる『人』としての医療者を目指して」は、総合的に完成度の高いエッセイ/論文であった。

「壮大な音楽の中で」は、難解な宇宙観と真正面から格闘し、単に読解するだけでなく、自らの思索に位置づけて文章を展開し、最終的に自らの学問観を問い返している点がよかった。量子力学と相対性理論の矛盾を解決する理論としての「超ひも理論」「宇宙観を根底から覆す楽しい理論」を説く本に出会い、知的好奇心を満たされ、古い価値観の変更という読書経験を展開する文章力は高く評価できる。

「社会を生きる『人』としての医療者を目指して」は、沖縄における「医学と文化の結節点」、臨床リアリティの衝突に出会う実習体験を問題関心の出発点とし、読書を通して課題を深化させ、自らの専門性を真摯に問い返している。その過程で「沖縄で生きていくことを決めた」自らの医療者のあり方を導き出している

点を、頼もしく感じた。対象とする書だけではなく、それに関連する論考もレビューした上で、課題を深めている。読書論文として、一つの方法を提示しているのではないか。

「全身で感じる読書—町田康『きれぎれ』を読んで」(船道晋作)は、「読書」を機に、自分の生活史をあらためて丹念にみつめ返し、「人と繋がる」こと、そのために「伝えようとする努力」をすることの大切さを確認し、「読書」が自分の人生においてもたらした意味と向きあおうとする姿勢に好感を抱いた。ただ前半と後半の展開にずれがあるので、構成を練り直せば、さらにいい展開になっただろう。

「影絵の住人」(中根志保)は、映画制作現場に身を置いた人の本を通して、「つくる」こと—創造と想像の双方に関わることに ついて思索を深めた文章である。読書を通して、今日の「つくる側を消費し観る側を空っぽ」にしてしまう文化のあり方を鋭く批判する視点を獲得し、消費という関係性を超える「つくる仕事」に就く決意を宣言したこの作品は、未来への可能性を感じさせる佳作である。

「『森林の思考・砂漠の思考』を読んで」(神沼守芸)は、高い評価があったが、引用と自分の意見の区別が見えなかったのが残念であった。もっと自らの思索の過程に位置づけて文章を展開してほしかった。しかしながら、後半において、本の読解を踏まえて現代日本が抱えている矛盾を照射し、沖縄の地域的特性を踏まえた発信の可能性を導き出している点は評価できる。

「『センス・オブ・ワンダー』を読んで」(山腰晃治)は、読書を通して、自然という神秘への繊細な感性の根源的な意味を認識し、自らが志す医学が「人体という大自然」と向きあう学問であることをあらためてみつめ返した跡が素直に綴られた佳作である。今後、沖縄の「自然の繊細さ」にも気づいてほしい。

全体として、読んだ本の作者の声に圧倒されることなく、自らの声を大事にした作品が高い評価を得た。応募した学生諸君には、本を読み、その本について文章を書くことの意味をあらためて問いかけるものとなったであろう。

「壮大な音楽の中で」

—『エレガントな宇宙』(ブライアン・グリーン著)を読む—

工学部4年次 小橋川 大地

対象図書 ブライアン・グリーン著「エレガントな宇宙」(林一・林大訳) 本館429.6||GR 教養図書



な んだこれは「一体どうなってるんだ」
この本を読むにあたって一体何度この言葉を呟いた
だろう。何故なら目の前に並ぶ文字の羅列が訴えてくる、
その意味が、あまりにも斬新で突拍子も無く、そして驚く
ほど深い意味を投げかけていたからだ。それはこれまで
積み上げてきた私の持つ時空間的価値観を打ち壊す、ま
さに衝撃だった。

『エレガントな宇宙』。これが、その本のタイトルである。
コロンビア大学で教鞭を執る物理学者のブライアン・グリー
ン氏が著したこの本は、文字通り宇宙の原理を説き明か
そうとする最先端の物理理論の偉大さと優美さを書き記
したものだ。氏が研究を続けている分野であり、この本の
主題となる「超ひも理論」について簡単に噛み砕いて記述
されており、発売元の欧米では、その斬新さからベストセラー
となった。この本が宇宙について語った、いわゆる学術書
であるにも関わらず多くの人々の関心を引いたその背景
として、この大宇宙に生きる人類の一人として自身の住
む世界の本質が知りたいという知的好奇心があるように
思われる。私の場合もまさにその通りで、同様の理由から
本書を手にとったのである。

先にも述べたように、本書には耳慣れない言葉、突拍子
も無い理論が数多く登場する。例えば、「全ての物質はひ
もとその振動で出来ている」「時間と空間はゆがむ」「こ
の宇宙は11次元で構成されている」「今この瞬間、何の前
触れも無く一人の人間が壁をすり抜ける可能性がある」
といった具合である。はっきり言ってこれだけでは何が
何だか分からない。本書を読み始めた当初、私は混乱の極
みにあった。先の例を加味してみると、私の知識の中の宇
宙と本書で語られる宇宙とがあまりにかけ離れていたか
らだ。「物質は粒子から出来ているのではなかったのか」「こ
の世界は3次元世界ではないのか」「人が壁を通り抜ける
わけが無い」といった様々な疑問や懐疑を感じた。学生
として未熟で勉強の足りない私にとって、超ひも理論が
指し示す理屈は斬新すぎて理解が出来なかったのである。
しかし、そんな私にも最新物理学が理解出来るように、著
者のグリーン氏は精一杯噛み砕いて理論を伝えてくれた。
その結果、疑問を抱きながらも読み進めていくうちに、私
にも超ひも理論が持つ大いなる可能性と、宇宙の深遠さ
のその一端を理解することが出来たのである。それは実
に驚くべき内容であった。

ま ず始めの驚きはアインシュタインの理論から始まっ
た。かの有名な相対性理論である。相対性理論に関
しては、ある程度の事前知識を持ち得ていたために割合
すんなりと理解することが出来たが、20世紀を代表する
天才の豊かな発想力と勤勉さにただ感心するばかりだった。
彼は重力に関する運動法則であるニュートン物理学の欠
点を理解し、それを含めた新理論である一般相対性理論
を生み出した。彼によれば空間と時間はゆがむものであり、
重力はそのゆがみによって伝わるものである。それまで
考えられていた時間と空間は絶対不変であるということ
は間違いであり、さらにこの宇宙には我々の知る3次元
の他に時間次元が一つ存在するというのだ。

この驚くべき理論は数々の実験により立証されており、
今や現代物理学の大切な支柱の一つである。この理論を
基に実に多くのものが生み出されてもいる。現代人はこ
の知的偉業を完成された理論、世界の真実の一つとして
疑うこと無く受け入れているが、相対性理論が発表され
た当時はその限りでは無かった。この理論はそれまで受
け入れられていた科学の秩序を崩壊させてしまったので
ある。私たちが日常的に慣れ親しんでいる時空の価値観
に背くアインシュタインの理論は、当然ながら当時の物
理学会を大混乱に陥れた。しかし、その混乱が収まってみ
れば人々は彼の理論を理解し歴史的発見だと褒め称え、
現在へと続く物理学が確立したのである。

次の驚きは量子力学だった。「本当に量子力学を理解し
ている者はいない」と言われるほど難解な基本原理を持
つこの学問は、やはり私にとっても十分以上に難解なも
のであった。量子力学に曰く、光は粒子でもあり波でもある。
どちらかであるはずだといった直感捨てて、その両方
の可能性を受け入れなければならない。さらに電子が示
す波の特性は確率の観点から解釈しなければならない。
すなわち、そこに電子が存在するかしないかではなく、波
としての性質の大きいところは電子が見つかる確率が高
いところなのである。

存在を確率で考えるこの理論は、それまで考えられて
いた現在から未来への変化の過程を、これまた打ち崩した。
それまでは数学上の計算のように未来への変化は起ころ
と考えられていたのだが、この新しい理論によるとある
特定の未来が実現するかどうかはあくまで確立しか求め
られない。すなわち、どの未来が実現するかは不確定で決
定せず、ゆえに未来は無限の可能性があるというのである。

この理論が発表された時もやはり価値観の訂正を迫られる人は大勢いた。先のアインシュタインもその一人であり、彼が量子論の支持者を戒めて言った台詞、「神はサイコロを振らない」はあまりにも有名である。アインシュタインの見解では未来は純粋に数学的に予測することができ、宇宙の未来の正確な姿には偶然の入り込む余地はなかったのである。だが、その後の度重なる実験により量子力学は正しく、アインシュタインが間違っていたことが証明された。イギリスの理論物理学者スティーヴン・ホーキング曰く「量子力学ではなくアインシュタインの方が混乱していた」のである。

し かし量子力学による価値観の崩壊はこれで終わりではなかった。リチャード・ファインマンによれば、電子が一点からある一点へと移動する際に通る道筋は実は一つではない。それどころか道筋は無限に存在し、始点から太陽へ向かったあと終点へと辿り着く道もあるというのだ。さらに量子トンネル効果によると、ある人が壁に向かって体当たりを敢行した際、その人を形づくる全粒子の確率によっては人体が壁の向こう側へと通り抜けてしまう可能性があるというのである。

ここまで読み進めた時点で私はめまいを感じたのを覚えている。量子力学が語る理論は直感的に受け入れがたいものばかりで、到底理解出来ないことを悟ったからだ。これならば先に書いた言葉が非常に強く実感できる。なるほど確かに「心底から本当に量子力学を理解している者はいない」。実際、物理学の最前線で量子力学を用いている人々は、この法則と公式が何故うまくいくのか、本当は何を意味しているのかを完全には理解しないままその法則にしたがっているという人が少なくないという。数々の実験と結果から量子力学が正解を導き出すことを利用しているに過ぎないのだ。しかし量子力学も相対性理論と同様に周囲の混乱を乗り越えて、一つの学問として存在している。相対性理論と同じように今や一つの真理として認められているのである。

一人の天才が作り上げた理論と、数多くの学者が作り上げた理論。この2つの結晶は互いにうまく機能し合い、今まで知ることの出来なかった宇宙の真の姿を人類に見せてくれるかに思えた。しかしそうはならなかった。2つの理論は互いに許容できない衝突を起こしてしまったのである。

そ の衝突は2つの理論が適用されるスケールが異なることから引き起こされた。一般相対性理論は惑星の運動や宇宙の構成といった極大のスケールの学問であったのに対し、量子力学は光子や電子といった極小のスケールの学問である。我々が真理と定めるこの2つの理論は、しかし互いのスケール内においてうまく機能しなかった。現代物理学の支柱の2つが互いに相容れなかったのである。これは大きな問題だった。

この矛盾を解決すべく世界中の物理学者が様々な理論

を打ち立てては失敗していった。何度となく繰り返された失敗の後、ついに2つの理論の矛盾を解消する理論が生まれた。それが超ひも理論であった。

超ひも理論の概要はこうだ。この宇宙を構成する粒子は実は振動する1次元のひもによって作られている。ひもの振動にはパターンがあり、そのパターンの違いが粒子の質量や性質の違いになるのだという。そして詳しい理由は省くが、基本となる物質がひもであるという、この理論は、現代物理学の支柱の衝突を避けることが可能なのである。それどころか2つの支柱を崩すことなく、衝突させることなく内包する偉大な統一理論として機能するのである。すなわちひも理論が真に完成されれば、この宇宙に存在する力の全てが統一され、人類がかつて辿り着くことの出来なかった宇宙の真の姿をあますことなく知ることが出来るかもしれないというのである。

初めのうち私はひも理論を信じる事が出来なかった。何故なら私達人類を含めた宇宙のあらゆる物質がひもによって出来ているという考えはあまりにも突拍子も無いと感じたからだ。それどころか超ひも理論によると、この宇宙は私たちが良く知る3次元とは別に、測定不可能なほど小さな6つの次元が隠されており、それに時間の次元を加えた11次元が宇宙の本当の姿なのだという。そのような宇宙の姿は私の理解の範疇を越えており想像することもできない。故に本来の宇宙とは違う、存在し得ない机上の空論だと安易にも考えてしまったのだ。


し かし著者は相対性理論や量子力学と同じように、超ひも理論も分かりやすく、丁寧に噛み砕いて説明してくれた。超ひも理論の要点を順を追って理解していくうちに、私は私の抱いていた様々な疑問や懐疑が次々と氷解していくのを感じていた。一見突拍子も無い理論もその根底となる理屈や考えを知れば整合性を含んでいることに気づき、その言葉の意味を理解することが出来たのだ。そして、それを繰り返していき、私が11次元の宇宙の存在を信じて良いと感じるようになった時、私は私自身意外な発見をしていることに気づいた。それは私が超ひも理論の偉大さを実感しているということ、超ひも理論を面白いと感じていること、そして、この理論をすごく気に入っているということだった。

あんなにも奇妙で取っ付きにくいと感じていた新しい物理理論は、しかし見方が変わるだけで実に面白いと感じることが出来るものだった。例えば超ひも理論によれば全ての物質は振動するひもにより構成されている。パターンを持ったひもの振動とは、すなわち音である。ひも理論の見方を変えれば世界は音楽で構成されていると言い換えることもでき、宇宙は壮大なオーケストラなのとも言えるのである。これは多少メルヘンかもしれないが、我々の宇宙観を根底から覆す楽しい理論であると思うし、何より宇宙はまさにエレガントだと感じるのである。

さらに超ひも理論は別の可能性も示す。それはいわゆる

るワープ、宇宙空間を近道できるワームホールの存在だ。超ひも理論によれば、空間を切り裂いて別の空間とつなぎ合わせたとしても、この宇宙には何の破綻も無く、まったく問題無いことになっている。これを利用すれば任意の位置にワープできるワームホールを作り出すことが出来るかもしれない。これこそが宇宙の持つ多次元性であり、超ひも理論の偉大さの一端である。


私が本書から知りえたことは非常にたくさんあり、とても書き切れるものではないが、それでも大きな枠組みで言えることが一つある。それは超ひも理論は2つの理論を統合したことで、極大のスケールでも極小のスケールでも現象を説明できるようになったものであり、それにより今まで物理学の矛盾や問題といった数々の難問を解決してきたのである。そしてそれにより我々人類がこれまで踏み込むことが出来なかった、宇宙の真理に向かって大きく前進することが可能となっており、今やその真理を知ることが出来るところまで来ているのかもしれない。超ひも理論は、まさに現代物理学の新しい朝なのである。

 と、ここまで来て私は考えた。一体何故私はここまで超ひも理論を絶賛するようになったのだろう。『エレガントな宇宙』を読む前と読んだあとで私の何が変わったのだろうか。ほどなくして私は思い至った。それは私自身の持つ価値観だ。

本書を読む前、私の価値観は、ごく一般的なつまらないものであった。宇宙は3次元であるし、物質は素粒子から出来ている。人が壁をすり抜けるなんてことは無く、宇宙が音楽で出来ているなんてことは考えもしなかった。私の価値観は小さく凝り固まったものだったのだ。しかし私は自前の小さな価値観といくばくかの知的好奇心を持って、新しい価値観が詰まった本書へと踏み出した。その過程は苦難の連続であった。最新の物理理論の斬新さに私の自前の価値観は全く太刀打ちできず、新しい疑問にぶち当たる度に立ち止まり考え、時にはページを戻ることさえしたのだ。しかし、それゆえに著者の詳しく優しい解説でもって疑問が氷解した時、言いようも無いよろこびを感じたのは事実である。実際、その過程は困難で苦しいものであったが、同時にとてつもなく楽しかったのだ。何故なら、最新の物理学が提示する斬新な宇宙の像は次々と私の小さな価値観を打ち壊し続けたからであり、また、それらが私の知的好奇心を満足させるに足るものであったからである。それはまさしく古い価値観の破壊であり、新たな価値観の創造であった。幸いにも価値観の更新という興奮の中で私は本書を読破することが出来たのである。冒頭で私は幾度と無く疑問の言葉を呟いたと述べたが、実際には「凄い」「面白い」といった驚嘆と絶賛の言葉がそれ以上に私の口から呟かれていたことをここで記しておく。

価値観、価値観と叫んできたが、振り返ってみれば新たな理論が投下される際、当時の物理学者も私と同様に新たな価値観に混乱していたことに気づく。相対性理

論に対する古典物理学者がそうであったし、量子力学に対するアインシュタインがそうであった。そして、学問に対して絶対の自信は持ち得ていない私よりも、物理学を生業としている彼らこそが私より大きな混乱を感じたであろうことは想像に難くない。彼らにとって、それまで学び研究してきた理論は大いなる価値を持ち、すでに変えようもないほどに重要なものであったはずだからだ。それまでの人生とも言える自信の理論を否定されるぐらいならば、彼らは新たに投下された新理論を出来る限り否定したかったに違いない。ここで価値観の崩壊は、プラスに働くこともあればマイナスに働くこともあると気づかされるのである。

 こで、さらに私は考えた。それは私と彼ら物理学者の違いである。何故、物理学者にとって新理論はマイナスになりえたのか、また何故私にとって新理論はプラスにしかならないのか。プラスの方が良いではないかという意見は置いておいて、私はそれは学問に対する姿勢の違いであると思う。最前線で研究を続ける彼らと私とでは、学問に対する姿勢は当然比べるべくも無い。しかし私も一応大学の末席に身を置く学究の徒の一人である。小学校から足掛け16年も学問を勉強しているならば、独自の宇宙観を持っていても良いはずではないか。新理論の投下に伴って自身の宇宙観を破壊されたことを悲しむ点が多量なりともあって然るべきではないかと思ったのだ。

しかし、この16年を振り返ってみて、新理論の投下を悲しむ権利など私には無いということに気づく。私にとっての学問とは、大いなる宇宙の真理を解き明かすものではなく、また自身の価値観を固めるものでもなかった。単にそこにある方程式に数字を代入して解を求めるだけという空疎なものであった。当然そこには宇宙の真理に迫ろうという情熱など無いし、自身を高めようという向上心も無い。惰性で学問を修めようとする私に独自の価値観など生まれようはずもなかったのだ。その時私は自らの怠惰を深く恥じた。超ひも理論が与えてくれた価値観の更新は、私自身の至らなさをも浮き彫りにしたのだ。価値観により考え方が変わり得るといえるならば、それにより自身の至らなさに気づいたこの事実は実に皮肉である。

何故、私は学問に真剣になれなかったのか。何故、修めた学問は私の価値観の構築には至らなかったのか。そして話は前後してしまうが、何故、『エレガントな宇宙』を、ほとんど事前知識も無いのに楽しく読むことが出来たのか。第一の理由として、私の情熱の不足が挙げられるのは重々承知だが、第二の理由として、私はこれまでの私の勉強の仕方が間違っていたのではないかとここで思い至った。すなわち、私がこれまで修めて来た学問に特別情熱を抱けなかったのは、学問それ自体を単なる方程式の羅列として捉えてしまっていたからではないかと思うのだ。さらに言えば、私が『エレガントな宇宙』を学術書として楽しむことが出来たのは、ニュートン力学から相対性理論

への過程、さらに量子力学の誕生とひも理論の構築に至るまで、数多くの学者の努力と苦勞を本書を通じて知ることが出来たからであり、これらの学問は単なる方程式ではなく、過去の学者たちが少しずつ積み上げてきたものの結晶であると認識しているからではないか、ということだ。

こ のことは、当然全ての学問に対しても言える。突然、何の前触れも無く誕生する学問などはありえないし、どんな学問も過去の学者の試行錯誤の上に成り立っているからだ。しかし私は今まで修めて来た学問の歴史的背景や、それに携わる学者の苦しみなど考えもしなかった。だから情熱を抱くことが出来なかったのであろう。その点、今回学んだ「ひも理論」は違った。学者それぞれの活動と苦しみを知ることができたし、それによって理論に有機的な人間臭さが混じったように感じた。つまり理論は生きているということを実感として理解することができたのである。そして、全ての方程式の基本的な意味をしっかりと理解したうえで、理論の歴史的背景をも理解し、それが生きていると実感する。そこまで行って初めて学問を修めたと言えるのではないかと考えたのである。

私の学問は未熟であった。それはもはや疑う余地も無い事実である。先の考えに大学4年次の今になって考えが至ったというのは悔しい。修正しようにも遅すぎるかもしれないからだ。しかし遅すぎるかもしれないが、何も出

来ないというわけではない。残された時間を精一杯使って、独自の学問を修めようと思っている次第である。

ところで、超ひも理論は理論としては確立されつつあるものの、実験による検証のしようが無いというジレンマを現在抱えている。超ひも理論が理論的裏づけとして必要としているスーパーパートナー粒子と呼ばれる粒子の存在が未だに確認されていないからだ。それにより超ひも理論の証明が今一つし辛くなっているのだ。しかしこのジレンマにも、もうすぐ決着がつく。今年、2007年にジュネーブの欧州原子核研究機構(CERN)で稼働予定の大型ハドロン衝突型加速器によってスーパーパートナー粒子の存在が確認されるかもしれないからだ。本書により超ひも理論を知り得た私にとって、これは実に胸躍る話である。もしスーパーパートナー粒子の存在が確認され、超ひも理論が疑いようのないものとなった時、人類は宇宙を探る新たな理論を手にすることになるからだ。仮にそうなった未来で、宇宙はどんな素晴らしい姿を見せてくれるだろうか。どんな壮大な音楽を奏でてくれるだろうか。今から興味は尽きない。

理論は生きている。世界中の学者が努力し続けそれが進化を止めない限り、また新たな価値観が生まれ、それは私の価値観をまたもや打ち壊してくれるだろう。その時、価値観が更新される興奮とよろこび、そして一抹の悔しさと悲しさが私に訪れることを、今はただ願うばかりである。

読書論文コンクール優秀賞(図書館長賞)受賞作

社会を生きる「人」としての医療者を目指して

琉球大学附属図書館におけるアーサー・クラインマン著『臨床人類学 -文化の中の病者と治療者-』との出会い

対象図書 アーサー・クラインマン著

『臨床人類学 -文化の中の病者と治療者-』(大橋英寿等訳)

医学部2年次 石原 宗典

医学部分館WM105 閲覧室(医)



はじめに

医 学の世界に関わらず、およそ全ての学問において、学者とその研究対象との関係というものは問題となる。しかし、医学という学問分野はその対象が人=ヒトであるが故にいっそう、問題は大きなものとなっているだろう。

医学という実践が最初に記録に残っている中では、メソポタミアにおける紀元前2000年頃のハンムラビ法典の記載が、かなり古いと言われる(シンガー、アンダーウッド『医学の歴史1 -古代から産業革命まで-』p.11, 1985 [1962])。そこでは、医師は治療が成功すれば報酬を得、失敗すれば腕を切られるというリスクの高い技術者としての地位を保っていた。

しかし、ヒポクラテスらによるギリシア時代の医学の隆盛が廃れ、聖書に書かれたことを第一とするキリスト教世界で科学の発達が停滞すると、ヨーロッパでは長らく医師という職業は日陰の職業となっていく。それが復活したのは、16世紀のルネッサンスに始まり18世紀にオスラー、ビシャなどにより、臨床医学としての治療が導入されて以降のことであり、そこから医学は科学としての地位を得たのである(市野川容孝、廣野喜幸、林真理編『生命科学の近現代史』pp.71-74, 2002)。これによって多くの疾患が系統的に整理され、治療法の進歩は格段に進み、世界的な死者の数は飛躍的に減少した。

しかし、一方でそこで得た「医学」という名の科学としての地位の下、多くの病を分類し、「ヒト」を研究対象とし

① 人=ヒトという表現は、社会科学における人間を意味する「人」、そして自然科学におけるホモ=サピエンスを意味する「ヒト」という両方を指して用いた。医学は生物学の基盤に立ちながら、社会の中に生きる人を診療することを目的とした、

学際的な学問、実践であるといえる。

て人体実験に近い研究が行われるようになり、また科学で説明できないことや文化的な部分が徹底的に排除されることとなった。

だ が我々は社会を生きる「人」である。我々は、根本的な感情として、物・実験対象として扱われることに大きな違和感を覚えるのだ。

仮に我々が研究の延長として臨床医学の世界に入っていくとどうなるか。そこに待っているだろう結論は悲惨なものだ。全国的に医学部入試に面接試験が課されるようになったのも、昨年度より医学教育の一環としてOSCE(客観的臨床能力試験)と呼ばれる臨床能力を試す試験が導入されたのも、そのような状況を解決するための方策にはかならない。患者を「人」として扱えない、コミュニケーションがとれない学生がどの大学でも毎年一定数おり、患者との間でトラブルとなっているというのも、おそらくそこに起因しているのだろう。

「ヒト」は他分野が研究対象としている「小説」や「ニュートリノ」や「経済理論」とは大きく異なる。それは生物としての客観的研究対象となる可能性を伴い、かつ自ら倫理や法律などによって、お互いに対する尊敬の念を持ち合うことを約束しあった存在なのである。ヒトを対象とするということは、そこに100パーセントの客観性を要求することはできない、ということなのだ。

しかし、医師や医学という学問は、その100パーセントの客観性や科学としてヒトを捉えるという立場を、日常生活の中へ持ち込んでしまった。人間の体の中は全て生化学で解釈されつくし、細胞レベル、分子レベルでの知識によって取り扱われることとなった。そのため、しばしば言われるように「人を診るのではなく病気を診る」という状況が作り出されることになってしまったのだ。

図書館でアーサー・クラインマンの書いた『臨床人類学』に出会ったのは、このようなことを考えていた時期だった。

クラインマンは、従来の医師とは異なり、人を観る(観察する)という文化人類学のプロセスを採りながら、医学自体を脱構築し、そして、その営みの持つ問題点や社会における文脈を研究していった学者である。その研究は、この本が出版された1980年より次第に賛同者を集め、現在では臨床の現場に活かされている。著者はさらに『病の語り—慢性の病をめぐる臨床人類学—』という本を書き、臨床における人類学の応用を考えながら、現在はハーバード大学で教鞭をとっている。

私 にとって、この本との出会いがあって初めて、西洋的科学的医療という行為が医療における一要素でしかないということに気づいたと言っても過言ではないだろう。実際に多くの医学部の学生は、医師や看護師という職業を医療における唯一の存在として思考し、それ以

外の方法がいかに我々の社会に根付いているかを気づかないままに医師となってしまふ。そうすると、西洋医学を学んだものは東洋医学を否定し、家庭で行われている治療や伝統的な治療を拒否し、民間信仰や宗教的な心の拠り所といった、科学において扱うことができない部分を蔑視することにつながっていくのだ。

この本に描かれていたプロセスは、まさにそんな自分の将来の姿に見え、そしてその点に私は怯えを感じた。そして、社会に生きる一人の人間としての学者、医師として自らを客観視していくことの必要性に気づかされた。また、そうしなければ、この沖縄という土地で将来医師・研究者として働くという夢に大きな困難がもたらされる、という恐怖感すらも感じたのだ。そのような見地から、私はこの本を大学入学後、最も影響を与えてくれた本として挙げたい。

それでは、この本の論旨のアウトラインとその意義について、さらに深く論じていこう。

本論：『臨床人類学』の学問的意義と、医学生にとっての意味

アーサー・クラインマンは、元々精神科の臨床医であったが、1969年から70年まで台湾に留学し、そこで自らがいた医学の世界の矛盾点に気づいた。本書はそのフィールド・ワーク体験に基づき得られた理論の書である。

当時の台湾では、西洋医学の医師、中国医学の医師、民間の呪術師(シャーマン)、占い師、漢方医や非合法の薬剤師といった数多くの医療に関係しているアクターが混在し、患者は自らの持っている信仰、主に中国の伝統的な身体観に基づいた健康に関する「信念」(belief)²に基づいて、そのどれを選ぶかを決めていっていたのだ³。

ク ラインマンが専門としていた精神医学疾患に関しても、台湾という土地には台湾としての土着の解釈が存在する。クラインマンが調査を行った1969年から1970年までの台湾では、近代的公衆衛生システムは確立していたものの、国民健康保険制度は成り立っておらず、その隙間にクラインマンの言うところの「民間の治療者たち」が医療の現場に入りこんでいた。それらの例をあげるならば、「薬草医、薬の行商人、皮膚病と眼病の無資格の専門家、占い師、人相見、産婆、土着の民間宗教の司祭、シャーマン、寺を中心に活動する筮竹解釈者、儀礼の専門家」などがそれである。そしてそれらのほとんどが無資格、非合法であったという(クラインマン『臨床人類学』p.13)。

クラインマンは、調査の中で、自らの思考基盤となっていた西洋医学を中心とした「生物医学的パラダイム」が通用しない世界に出会っていく。例えば西洋の医学的分類に明確に該当するものがない、「鬱傷」という症状にクラインマンは出会う(ibid. p.93)。彼にインフォーマントが

² 「信念」という用語の用法に関しては、文化人類学において相当の蓄積がある。詳しくは、ダン・スベルベル『表象は感染する』(新曜社)第1章、第4章などを参照。

³ クラインマンはこの発見に基づき、ハーバード大学の研究者として研究を続け、現在彼は同大学で臨床社会科学を教授している。

説明した内容によると、「鬱傷」とは体の病気であることもあれば、心の病気であることもあり、運動不足が原因でよく起こるものだという。さらに心配しすぎると胸の血流が悪くなり、それによって息づかいがひどく早くなり、ため息をつくようになる。こんな症状だというのだ。この他にも「悶」という概念を用いた病気の説明、熱／冷の二項対立による病気の説明なども存在している。

ただし、ここで非常に重要になってくるのは、台湾では必ずしも常に彼らの言葉で語られる病ばかりが存在しているわけではないという点である。クラインマンは、伝統的な治療法の中に、西洋医学の必要性が融合している例を見てとる。ある患者は、子供の成長のために麻疹にかかることが必要であるという土着の信念を抱いており、その際にはシャーマンによる儀式が必要だと考えていた。しかしその一方で麻疹が脳炎につながることも理解しており、その際必要な抗生物質を飲ませることに躊躇がないのである (ibid. p.103)。

こ のようなアンビバレントな状況は一体何によって作り出されているのか。クラインマンが出した結論は、患者が「臨床リアリティ clinical reality」と呼ばれる社会的なリアリティの中を生きていたために起こっているというものだ。「病気についての信念、病者をとる行動、病者の期待する治療、家族や治療者の病者への対応の仕方」(ibid. p.41)といった内容はまさに述べた治療法の多様性、「ヘルス・ケア・システム」と同様に、文化によって構築されているという考え方をとり、そこに社会の作用を見てとるのである。外部からやってきたクラインマンのような医師が見ることができるのは、まさにその臨床の場での具現である、「臨床リアリティ」なのである。

クラインマンはこの発想を土台にして12のケース⁴について臨床の場における患者と治療者の相互作用、そしてその「予後」とも言える、追跡調査を行い、さらなる分析へと進む。

西洋医学では区別のない、人類学的パラダイムから見た「病 illness」と生物医学的パラダイムから見た「疾病 disease」、そして「癒し care」と「治療 cure」といった用語を区別⁵し、クラインマンは西洋医学のパラダイムの外に存在している治療者たちも、「疾病」を治療するという面では十分でないものの、臨床リアリティの中で十分に「病」を「癒して」いるのだと考えたのである。そしてこの事実は逆写像として西洋医学の欠陥を映し出す。それは西洋医学の「病」を「癒す」効果の限界なのである。

このような内容が本書におけるクラインマンの論点であった。さて、それでは本書におけるクラインマンの研究は、

一体どのような点において評価されるべきであろうか。

ま ず述べておくべきなのは、クラインマンのこの研究が、「医学」の勉強以外の学問分野を学ぶ余裕がない医学生、もしくは医師に対し、警鐘を鳴らしている点である。クラインマンが述べたことは、多くの医師が現場で気づいていながら、全くの個人の技量のみで対応を迫られていることでもある。我々の生きている人類学的・社会的パラダイムと、医師の生きている生物医学的パラダイムは、多くの場合臨床リアリティという場において衝突をきたすことになっている。治療を行う際に、最も科学的に良い方法を医師が勧めようとも、患者には経済面や思想信条、文化などの面からそれを拒むことがありうる。延命治療などはまさにその典型例である。治療の場というのは、まさに異なるパラダイムの衝突の場なのである。それゆえに生じる軋轢は大変大きなものとなりうる。

そこにどう対処すれば良いかは大学で教えてはくれない。せいぜい倫理学の授業で簡単なディスカッションをするくらいのものであり、それは結局のところ確固とした対応策を与えてくれる手段にはなりえていない。この事実をはっきりと指摘するという意味で、本書を将来医療に携わろうという人間が読むことに大きな意義がある。

ついで1980年の時点で care と cure の概念を分けていたことも慧眼であり、民族医療の側が care のセクターを担っていることを指摘したことは重要である。文化人類学の側が最も好む民族医学の説明は「民族医療にも役に立つものがある」という、民族医学の科学的価値を強調するものである。しかしこれはさほどの意味をなさない。もちろん、土着の信仰の中に非常に効果の高い薬草の使用法があった、と述べることや、彼らには部分的にせよ現在の医学にも通じる医学知識があった、と主張することは評価に値しよう。だが、その人々が持つ「ヘルス・ケア・システム」がそれのみで継続的な健康を現代の世界で生み出すことができなければ、結局のところ回顧的な価値しか生み出さず、それは医療者側から見る文化人類学の不当な評価へとつながるものと考えられる。クラインマンの発想はこの観点から見て、実は文化人類学を援護する貴重な効果を持っていると言える。

し かし、クラインマンの研究の最も評価されるべき点は、何よりもその研究成果とも言える文化人類学的な診療解釈、評価を実際の診療に導入する提言をしたことである。西洋医学の医師にとって、もちろん精神科医が最も「非西洋医学」に対し寛容であることを差し置くにしても⁶、臨床の場に文化人類学の問題を持ち込むことは嫌われる。そのことを念頭に置きつつ、クラインマンは

4 非常に興味深いケースが多いのだが、ここはその要約のために限られた紙面を割くことはやめておく。

5 安楽死やホスピスなどの問題とも関連するが、痛みを和らげる対処療法は長く「治療」とは考えられてこなかった。根本原因の解決にはならないからである。しかし、それも一方で心の癒しにつながる重要な医療行為の一つであると現在では考えられている。これらも「治療」と「癒し」の重要な例の一つと言えるだろう。

6 精神医学は、ジグムント・フロイトに端を発し、ユングなどを生み出した力動精神医学(かつての精神分析)とも関わりが深く、心理学的なアプローチに対して概ね寛容であると言える。これは斎藤環や和田秀樹、香山リカ、北杜夫など、心理分析を社会に応用する評論や文筆活動を行っている精神科医が日本で顕著に多いことからよくわかるだろう。

医師教育、看護学などの分野に臨床リアリティの認識という思考法を導入していく提言をした。本書の執筆は1980年であることを考えると、革新的であると言わざるをえない。

もちろん本人もそれがいかに革新的な発想であるかということには気づいており、実現の可能性が低いものと記述している。また、クラインマンの論文について触れた医療人類学者の波平恵美子は「言うはやすく行うは難し」(波平恵美子『病と死の文化』 p.246)と述べ、その将来展望を疑っている。しかし、世界的な医療のあり方の見直し、特に患者と医師との関係の見直しが行われる中で、クラインマンの提言は医学にとって欠けていた部分を補う大切な一ピースととらえられることとなった。

10年が流れ、2000年に出版された『開発の文化人類学』の中では、とうとうクラインマンの思想は現実の医学部における教育という形をとり日本でも結実した、ということが報告されている。直接にクラインマンの影響がなくとも、間接的な形、すなわち文化人類学者を医学部の教育者として採用することで医師の教育を行っていくという方法が山口大学の医学部で採られ、そこで、その教育に携わる星野晋から実践と理論的背景に関する論文が出たのだ(星野晋「医学および医学教育における人類学の役割と可能性」、2000、『開発の文化人類学』所収)。そこでは、異なる臨床リアリティにおいていかなる対応をとるべきかという方針について、我々とは異なる文化を持つ民族集団内での治療をテーマにディスカッションするという、まさにクラインマンの提言を実現した教育が行われていたのである。

だが、当然のごとく、すべてがクラインマンの思想を支持する方向へと進んでいるわけではない。最近、治療に関してもEBMという考え方が発達してきている。EBMとは、Evidence-Based Medicine(科学的根拠に基づいた治療)の略であり、統計的なデータに基づく診療を指す。かつての厚生省の医療技術評価推進検討会によれば、EBMとは「診ている患者の臨床上の疑問点に関して、医師が関連文献等を検索し、それらを批判的に吟味した上で患者の適用妥当性を評価し」科学的根拠を元に治療を進めていくものであるという(厚生省健康政策局研究開発振興課医療技術情報推進室監修『わかりやすいEBM講座』p.10、2000)。治療というものはえてして経験則として捉えられがちである。しかし、経験則は、しばしば慣習化してしまい、無駄な薬を出す、無駄な治療をすることにつながりかねない。EBMは、これを防ごうという考え方である。

これは当然評価されるべきことではある。が、一方でこれをあまりに強調しすぎることで、非EBMが無価値化さ

れてしまう。すなわち、臨床リアリティにそぐわない治療、careの部分が追いやられた治療へと進んでいってしまう可能性を秘めているということだ。

また、先に述べた医学教育への応用も、やはり医学生の手時間が足りないという状況によってその意味を問う声も学生から出ているという。

しかし、あくまで私が本書から学び想像したことは、どんな学生もいつかはこの臨床リアリティとぶつかる日が来るということである。これは免れようと思って免れることができるものではない。これを免れるためには医療関係者専門の病院に勤めることくらいしかできることはないのである。

そしてcareの部分の重要性は全く変わっておらず、この部分は自分が将来どんなに忙しくなろうとも忘れてはいけないということもまたしかり、である。

解決すべきなのは、クラインマンの結論をないがしろにしない程度に余裕のある医師という職業のあり方をいかに作り出すか、という問いなのである。

おわりに

クラインマンの著作に出会ったことで、私にとって自分の目指す学者像、医療者像というものがかんまりはつきりとしてきた。沖縄という独自の文化を持つ環境の中で、既に私は多くの「医学と文化の結節点」とも言うべき状況を目にしてきた。1年次に行われた救急車実習という実習授業では、同級生の一人が、脳梗塞で倒れた患者に救急車を呼んでいた家族が一方で「マブヤ、マブヤ、ウーテーケー」と言いながらススキを振っていたという話を聞いた。那覇の消防署の管内での話である。

この件に遭遇した場合、科学という立場からのみ見た、学者としての医師ならば、何の迷信を血迷って信じているのだ、と言う人間もいるだろう。しかし、沖縄に住む人間としてマブイ⁷を失うということはある意味死に等しい内容を含んでいる。実際、脳梗塞で倒れてから救急車が到着するまで専門家ではない家族が、何かできることはない。それならば、そのマブイを戻すという儀式は純粋に肯定的意味を伴うと解釈しても何ら問題はない。クラインマンならばこう言うだろう。そう、それはcareの問題であり、人類学的パラダイムとの衝突なのである。

沖縄で生きていくことを決めた私にとって、このようなことは今後決して避けて通れない。「民間信仰と精神科医療」という論文の中で、本部記念病院の院長であった高石利博は信仰と病気があいまった様々な事例を報告している(『沖縄の文化と精神衛生』所収、1984)。中には脳腫瘍があるにも関わらず、ユタの説明のせいで見過ごされた事例もある一方で、信念の問題が病と扱われるケースも

⁷「マブイ」や「ユタ」に関する沖縄の信仰については、大橋英寿著『沖縄シャーマニズムの社会心理学的研究』(弘文堂)等の文献を参照していただきたい。

ある。今後、必ず自分もこういった例と出会うだろう。今の準備もせずに、そこに向かうことは恐ろしい。高石はその点を「治療」や「科学」といった思考にとらわれないように切り抜けているが(ibid. p.42)、自分はどのように切り抜ければいいのか。科学やヒトという生物の治療が、医師の行為ではないということ、いかに実践に活かしていけばいいのか。考えなければならない。

ま た、医学を信じすぎようになったせいで、現在では医学の万能性さえも謳われている。そして、その万能性が裏切られたとき、すなわち努力しても治しようのない病気が生じたり、医師の力では診断のしようがない疾患が突発的に起こったりした際に、医師はこれ以上ないほどの責められ方をし、訴えられることになるのである。そんな現状がある。

クラインマンの実践のように医学を相対化すること、医学を社会的文脈に戻すということは、死を避けられない営みの一部として受け入れることにもつながるし、また西洋医学で治療のできない疾患に対する心の癒しにもつながっていく。そのことを色々な場で患者にも他の医師にも伝えていく、そして、その理論の土台の元、医学の道を追求していくことが、自分の今後の使命の一つであるということにもはっきりと気づかされた。

自らの将来を見据えた上で、琉球大学附属図書館において本書と出会ったことは運命的であり、また本書を二度、三度と読み返すことになるだろうことも確信している。それは生物医学的パラダイムにとらわれることで、文化の中で生きていること、すなわち我々が「ヒト」という生物である一方で「人間」であることを忘れることのない学者、医療者として生きていくために、本書が働きかけてくれるからである。本書を備えてくれた附属図書館に謝意を表しつつ、本論を終えたい。

参考・引用文献

- アンダーウッド、アシュワース(Underwood, A.), シンガー、チャールズ(Singer, C.) 『医学の歴史 1 古代から産業革命まで』
東京：朝倉書店. 1985[1962]
市野川容孝, 廣野喜幸, 林真理編 『生命科学の近現代史』
東京：勁草書房. 2002
クラインマン、アーサー(Kleinman, A.) 『臨床人類学—文化のなかの病者と治療者』
東京：弘文堂. 1992[1980]
厚生省健康政策局研究開発振興課医療技術情報推進室監修
『わかりやすいEBM講座』 東京：厚生科学研究所2000
高石利博「民間信仰と精神科医療」 『沖縄の文化と精神衛生』
(佐々木雄司編) 東京：弘文堂. 1984
波平恵美子 『病と死の文化—現代医療の人類学—』
東京：朝日新聞社. 1990
星野晋 『医学および医学教育における人類学の役割と可能性』
『開発の文化人類学』(青柳まち子編) 東京：古今書院. 2000

琉球大学附属図書館貴重書展「琉球・沖縄の歴史と文化を探る」

— 北谷町立図書館と連携して開催 —

琉球大学附属図書館は、毎年、公共図書館と連携して、資料の公開や地域貢献・地域連携の一環として行っている貴重書展を平成18年度は沖縄本島中部にある北谷町立図書館で開催しました。

展示会テーマは「琉球・沖縄の歴史と文化を探る」で、所蔵している沖縄関係の貴重書の中からテーマに沿って選んだ25点と大正期の沖縄を撮影したガラス版写真のパネル、明治期沖縄の写真アルバム、琉球大学歴史パネルなどを展示しました。

平成18年10月27日～11月2日の開催期間中、約700名の見学者が訪れ、その模様はテレビや新聞でも紹介されました。

見学者からは「昔の貴重な文献に触れることができよかった」「もっと他の資料もみたい」「他の地域でもやって欲しい」といった感想・要望を書いたアンケートが多く寄せられ、また見学者の中には興味深い展示資料が多いことから、家族を呼んで見学を勧める人もいるなど盛況な展示会でした。

展示物は下記のとおり。

- 1 仲吉本『おもしろさうし』 2 冬至当日之公事 3 年中儀礼 4 正五九月弁之嶽・末吉御参詣之時公事 5 屋

- 嘉比工工四 / 屋嘉比朝寄[編] 6 恩河本・小祿御殿本組踊集 7 琉歌輯(喜納誌) 8 蔡氏具志頭親方文若案文 9 沖縄集 / 宜湾朝保[編] 10 指南広義 / 程順則著 11 周煌の掛板 12 島津家宛花押印状の内、島津家家老衆宛て小祿親方の書状 13 首里・中山王府花押印状三通の内、4月6日付の中山王尚育より島津老岐宛ての書状 14 琉球人行列附 15 琉球人行列図(錦絵) 16 渡琉日記 17 琉球語新訳全書 18 沖縄対話 上下巻 19 製糖取締旧慣内法 20 南 鵬 21 沖縄写真帳 22 栗原自然科学研究所移民調査写真帳 23 甘藷百珍 24 琉球游记(相川俊孝俳画帖) 25 銅刻琉球国全島図 / 青江秀著 大正期の沖縄—E.R.プールのガラス写真—パネル展示、明治期沖縄の写真アルバム

内容は下記のURLで公開中です。

<http://www.lib.u-ryukyu.ac.jp/digia/tenji/tenji2006/01index.html>

(文責：図書館専門員 松原敏夫)



トピックス

- 平成18年10月10日(火)にJICA集団研修「熱帯バイオマス利用」コース外国人受託研修員6人の方の図書館訪問があり、図書館利用ガイダンスとして図書館ツアーを行いました。
- 平成18年11月8日(水)～11月10日(金)の間、浦添高校からのインターンシップ(就業体験)として高校生2名が、図書館業務を体験しました。
- 平成18年11月29日(水)に県内図書館協議会の一環として7館15名による「ILL担当者情報交換会」を行い、琉球大学参考調査係でのILLの実施について見学の後、会議室において情報交換が行われました。
- 平成18年12月7日(木)に千原会場理系複棟102教室、上原会場臨床講義棟101教室において琉球大学学術リポジトリ説明会を開催しました。説明会では、学術リポジトリの地域社会へのメリット、リポジトリ発信までの流れ、登録の際の手続き等の説明のあと、質疑応答がなされました。



△ 学術リポジトリ事務局員の説明



△ 親川学術リポジトリ運営連絡会議長(館長)の挨拶

- 平成19年1月26日(金)に琉球大学研究者交流施設・50周年記念館において高鷲忠美八洲学園大学附属図書館館長による沖縄県大学図書館協議会講演会「図書館を活用して学びの質を高める～情報リテラシー教育の実際～」が開催されました。この講演会には大学の図書館関係者だけでなく、大学教員・学生および小・中・高校の司書等約70人が参加し、講師の説明に熱心に耳をかたむけていました。



△ 講演する高鷲八洲学園大学附属図書館長

- 平成19年2月23日(金)に琉大図書館多目的ホールにおいて琉球大学学術リポジトリ国際講演会が開催されました。講師に延世大学校附属中央図書館の金泰樹(キム・テス)館長を迎え延世大学でのリポジトリに対する取組み状況、これからの展望等についての講義をいただきました。講演会には県内はもとより国内の大学、情報学研究所等、多数の機関から約60名を超える方の参加がありました。



△ 延世大学校附属中央図書館金泰樹館長の講演

図書館見学者

日時	見学者
9月28日(木)	球陽高校 1年生 300名
10月16日(月)	具志川高校 生徒60名
10月23日(月)	特定非営利活動法人ゆいベース・エル 一行
11月15日(水)	名護高校 生徒80名
11月21日(火)	大韓民国 国立済州博物館館員一行
12月8日(金)	中国大学図書館担当者訪日団31名



△ 中国大学図書館担当者訪日団

当館資料の放送取材刊行物掲載

放送・発行日	番組名・書名	提供資料
2006.9.9	BS日テレ「うちなー亭」	中山伝信録 伊波普猷文庫 薩摩往復文書集 仲原善忠文庫
2006.12～2007.3	日本出版社「ビジュアルブック 語り伝える沖縄戦」	仲原文庫 琉球年代記 江戸上り「琉球人行列図錦絵」 琉球人來朝之図 琉球王府関係文書 薩摩藩宛国王三司官の書状 断片綴(針竿関係) プール氏ガラス版写真 9点 海外移民会報 南島創刊号 表紙 矢内原文庫 植民政策 満州開拓地案内
2007.5.22	朝日出版社『週刊朝日百科・人間国宝』第52号	①沖縄県指定重要文化財「屋嘉比工四」(琉球古典音楽の楽譜) ②玉城朝薫作の組踊台本 小椋御殿本組踊集(恩河本)「熱心撞入」
2006.12	沖縄県高度情報化推進事業『琉球在来豚/アグー』 沖縄県畜産PRビデオ制作	プール氏ガラス版写真 3点 No.3 那覇の路地 No.22 村の市場、大根 No.23 供物、山羊と豚 沖縄で豚を運ぶ
2007.3.30	呉市市史文書課「下蒲刈町史」	琉球人行列附 仲原善忠文庫 江戸上り「琉球人行列図錦絵」

本館

4月 April 2007							5月 May 2007							6月 June 2007						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7	6	7	8	9	10	11	12	3	4	5	6	7	8	9
8	9	10	11	12	13	14	13	14	15	16	17	18	19	10	11	12	13	14	15	16
15	16	17	18	19	20	21	20	21	22	23	24	25	26	17	18	19	20	21	22	23
22	23	24	25	26	27	28	27	28	29	30	31	24	25	26	27	28	29	30		
29	30																			

7月 July 2007							8月 August 2007							9月 September 2007						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7	5	6	7	8	9	10	11	2	3	4	5	6	7	8
8	9	10	11	12	13	14	12	13	14	15	16	17	18	9	10	11	12	13	14	15
15	16	17	18	19	20	21	19	20	21	22	23	24	25	16	17	18	19	20	21	22
22	23	24	25	26	27	28	26	27	28	29	30	31	23	24	25	26	27	28	29	
29	30	31											30							

医学部分館

4月 April 2007							5月 May 2007							6月 June 2007						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7	6	7	8	9	10	11	12	3	4	5	6	7	8	9
8	9	10	11	12	13	14	13	14	15	16	17	18	19	10	11	12	13	14	15	16
15	16	17	18	19	20	21	20	21	22	23	24	25	26	17	18	19	20	21	22	23
22	23	24	25	26	27	28	27	28	29	30	31	24	25	26	27	28	29	30		
29	30																			

7月 July 2007							8月 August 2007							9月 September 2007						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7	5	6	7	8	9	10	11	2	3	4	5	6	7	8
8	9	10	11	12	13	14	12	13	14	15	16	17	18	9	10	11	12	13	14	15
15	16	17	18	19	20	21	19	20	21	22	23	24	25	16	17	18	19	20	21	22
22	23	24	25	26	27	28	26	27	28	29	30	31	23	24	25	26	27	28	29	
29	30	31											30							

開館時間 黒(Black) 8:30~22:00 緑(Green) 10:00~20:00 青(Blue) 8:30~17:00 赤(Red) 休館(Close)

本館だより

平成18年10月10日

第253回 附属図書館運営委員会録

- 審議事項
 1. 琉球大学学術リポジトリ規程(案)及び琉球大学学術リポジトリ投稿細則(案)について
- 報告事項
 1. 2007年外国雑誌について
 2. 延世大学中央図書館国際交流協定について
 3. 読書論文コンクールについて
 4. 附属図書館貴重書展について

平成19年3月2日

第254回 附属図書館運営委員会録

- 審議事項(メールでの審議)
 1. 延世大学校との大学間交流協定締結について

平成19年3月26日

第255回 附属図書館運営委員会録

- 協議事項
 1. 平成19年度琉球大学附属図書館研究開発室員について
 2. 琉球大学学術リポジトリ運営連絡会委員の推薦について
- 報告事項
 1. 読書論文コンクールについて
 2. 琉球大学学術リポジトリについて
 3. 概算要求について

医分館だより

平成19年1月22日

第60回 医学部分館運営委員会

- 協議事項
 1. 除籍予定図書について
 2. 琉球大学学術リポジトリへの研究成果等の投稿について
- 報告事項
 1. Nature Life Science の購入について

平成19年度新入生オリエンテーション案内

図書館では、新入生のための図書館オリエンテーションを行います。充実した大学生活をおくるために、図書館の活用法をガイドしますので、ぜひご参加ください。

開催日	4月6日(金)~20日(金)の毎日(土・日を除く)
開催時間	(午前)12:15~12:45 (午後)16:30~17:00 1日2回(1回の定員は20人までです)
集合場所	本館 カウンター前
内容	図書館施設の案内と図書館活用法

予約等はいりません。3分前に集合してください。
問い合わせ先 | 電子情報係 (tel: 098-895-8167)